

言語の写像性は言語獲得を促進させるか : 手話獲得研究からの知見

著者	武居 渡
雑誌名	コミュニケーション障害学 = The Japanese journal of communication disorders
巻	23
号	2
ページ	143-151
発行年	2006-08-31
URL	http://hdl.handle.net/2297/19315

■特集 〈コミュニケーション障害と発達心理学の接点〉

言語の写像性は言語獲得を促進させるか：
手話獲得研究からの知見*

武居 渡**

Does Iconicity of Language Facilitate Language Acquisition?:
Perspectives from Research on Sign Language Acquisition*

Wataru TAKEI**

手話は、主にろう者によって使用される音声言語と同等の複雑性をもった自然言語であり、音声言語と同様の枠組みで分析が可能である。そのため、手話が音声言語と同等の自然言語であるという点を強調するあまり、音声言語にはみられない特徴である写像性が手話にはみられるという点は、手話研究の中では軽視されてきた。本研究では、手話の写像性に関する内外の議論を整理したうえで、手話獲得における手話の写像性の影響と言語獲得における写像性の果たす役割について文献的に考察した。その結果、手話初語獲得、動詞の屈折、CL、ロールシフトなど、手話言語を特徴付ける文法の獲得に手話の写像性が影響を与えていたが、その程度や影響を受ける時期については、文法事項によって異なり、写像性のある領域から写像性のない領域へという単純なモデルでは説明できないことが明らかになった。

Key Words: sign language, iconicity, language acquisition, verb agreement, classifier

1. 手話言語とは

手話言語とは、主にろう者によって使用されている視覚-手指モダリティを用いた言語であり、音声言語とは異なる語彙、文法体系を有した自然言語である (Baker, Cokely, 1980; 米川, 1984)。1960年代半ばから、言語学的な観点から手話言語を分析する研究がアメリカを中心に多くなされるようになり、手話言語が、音声言語と同様、音韻、形態、統語のレベルで分析が可能であることもわかってきた。まず、手話言語がどのような言語であるのかについて、過去になされた手話言語学からの知見をなぞりながら概観したい。

音声言語では、音素が時間軸上に配列され、継時的に単語が形成されることが知られており、その特徴は線

状性とよばれる。一方、手話言語は、非常に複雑な音韻構造をもっている。手話言語の場合、要素の継時的結合と同時的結合が複雑に絡み合った構造になっている。手話言語の音韻とは、手話単語を表す際の「手型」、手指の「運動」、手型が表出される「位置」の3要素をいい、これらが同時的に結合し、1つの単語が形成される (Stokoe, Casterline, Croneberg, 1965)。手話単語の音韻的構造について、図1に示した。例えば、|ネコ| という手話単語は、握った手で頬をこするネコの仕草によって表される。この単語は、握った手 (S手型) という「手型」と、手首を屈伸させるという「運動」と、この運動が行われた頬という「位置」の3つの要素 (音韻) に分解でき、「手型」、「運動」、「位置」の3つの要素が同時的に結合することにより |ネコ| という単語ができる。そして、このような音韻的構造をもつ手話単語が時間軸上に継時的に配列されることにより、手話の文が構成される。なお、手話に「音」は使われないが、音声言語という音韻に相当するものとして、手話言語学の

* 2006年4月1日受理。

** 金沢大学教育学部 (〒920-1192 石川県金沢市角間町), Faculty of Education, Kanazawa University (Kakuma, Kanazawa, Ishikawa, 920-1192, Japan)

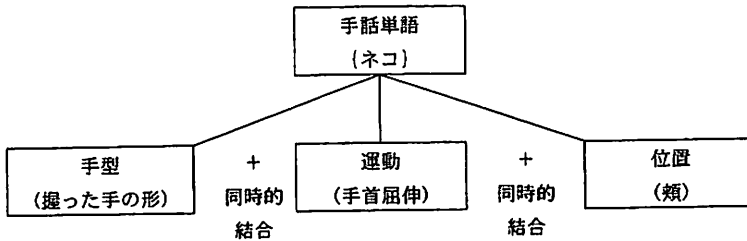


図1 手話単語の音韻構造

中では「手話の音韻」という用語が使われる。

このように、手話言語と音声言語では、使用するモダリティも音韻間の結合の仕方も異なるが、分割可能な最も小さな単位として「音韻」という単位を考慮することができるという点では、手話言語は音声言語と同様の構造をもっているといえよう。

また、手話言語は語形変化が豊富な言語であり、同じ手話単語であっても「手型」や「運動」、「位置」を変化させることによって、動詞の屈折や複数性の表示、アスペクトの付加などさまざまな文法事項を表すことが知られている。特に、手話の動詞は主語と目的語によって動詞の運動が変化し、運動の視点と終点が主語と目的語に一致する。このような語形変化を動詞の屈折という。例えば、「電話をかける」という動詞は、辞書では親指と小指を進展させた指文字の「や」の手型を耳元から前へ出す仕草で表される。「私があなたに電話をする」という場合は、この辞書形を用いるが、「あなたが私に電話をする」という場合は、指文字の「や」の手型を前方から手前側に動かすことによって表す。つまり、2人称である相手側から1人称である自分の方へ動かすことによって表される。また斜め前方に「彼」という手話を作り、自分から斜め前方へ指文字「や」の手型を動かすことにより、「私は彼に電話をする」という主語と目的語を包含した動詞が作られることになる。

このように、「電話をかける」「言う」「見る」などのような手話の動詞は、主語や目的語によって動詞の運動の始点と終点に変化するが、すべての手話動詞が屈折による語形変化をするわけではない。「好き」「知る」のような手話動詞は、主語や目的語にかかわらず動詞の語形は一定である。このため手話学習者は、どの動詞が屈折をし、どの動詞が屈折しないかを理解しないと、文法的に誤った動詞の使用をすることになる。

また、手話文法の大きな特徴として、非手指信号(Non Manual Signals: NMS)の使用が挙げられる。NMSとは、手話と共起する表情や視線、体の動きなどを用いて、手話に文法的意味を付加したり、副詞的な意

味を付加したりする役割を果たしている。例えば、日本語の疑問文は文末に疑問を表す助詞をつけたり、語尾のイントネーションを上げたりすることによって表されるが、手話の場合は、手話単語に「WH疑問」あるいは「Yes-No疑問」の表情が共起することによって表される。それ以外にも、「働く」のような手話動詞にさまざまなNMSが共起することにより、「一生懸命働く」「適当に働く」のように副詞的な意味を付加することができる。手話言語におけるNMSは、単に話者の情動が無意識的に表現されるものではなく、手話話者が極めて意図的に表情を変化させ、視線の向きを変えることによって、それらが文法マーカースとして使用されることになる。

このように、手話言語はジェスチャーとは異なり、極めて精緻な文法を兼ね備えた自然言語であり、手話の理解や表出には、音声言語と同様の認知処理がなされていることが推測される。このことは、手話を第一言語として獲得したろう者が脳損傷により失語状態になったときに現れる症状についての報告からも裏付けられる。Poizner, Klima, Bellugi (1987) は、アメリカ手話が第一言語である脳を損傷したろうの被験者6名について、手話言語の保存状態を脳損傷部位と対応させながら詳細に分析している。その結果、手話は視覚言語であるにもかかわらず、音声言語と同様左半球損傷のみに手話失語が見られたことを明らかにしている。さらに、音声言語に見られる失語と同様、ウェルニッケ野を損傷すると流暢ではあるが文法的誤りを多く含み、音韻レベルの誤りが頻繁に観察されるウェルニッケ失語と極めて類似した手話失語がおき、ブローカ野を損傷すると、努力性の発話で語形変化を伴わない1語文が見られるブローカ失語と類似した手話失語が見られるという。このような報告は、使用モダリティは音声言語と手話言語では異なるが、高次の言語処理は同様の過程で行われていることを示唆している。

手話が音声言語と同様の自然言語であり、手話の理解や表出の際にも、音声言語と同様の処理がなされる

としたら、手話環境にあるろう児が手話を第一言語として獲得する過程は、聴児が音声言語を獲得する過程とほぼ同じであるということが予想される。喃語、初語、2語文の生成、語彙、誤用など、言語獲得のさまざまなレベルで、音声言語獲得と手話獲得が平行であることが、内外の手話獲得研究の蓄積によって明らかになってきた(武居、鳥越, 2000; 武居, 四日市, 1999; 鳥越, 1988, 1995)。

2. 手話言語の写像性

一方で、手話が音声言語と同等の複雑性、精緻性を有した自然言語であるということを用いるために、手話言語がもつ写像性 (iconicity) という特徴は、手話研究の歴史の中で徐々に軽視されるようになってきたという側面がある。ここでいう写像性とは、言語形式と意味の間に関係性が見出されることをいう。言語は、言語形式と意味の間の関係は恣意的であり、その言語を知らない者が見たり聞いたりしたとしても、その意味を推測することができないという特徴を有している。この特徴を恣意性 (arbitrariness) というが、手話の場合、手話を知らないものがある手話単語を見たとき、パントマイムと結び付けてその意味を想像できるものがある。日本手話では、耳元に握った手を当て、顔を傾けることで「寝る」という意味を表すが、日本手話を知らないものがこの単語を見て「寝る」という意味を想像することができよう。手話に写像性があるということは、音声言語と異なり、手話は無意味な記号の集合ではなく、パントマイムやジェスチャーと同類のものであると解釈された。これは、ろう者からの強い要請である「手話は言語である」という主張と齟齬をきたすと考えられたため、1960年代から手話研究が進む中で、徐々に軽視されるようになってきた。

Klima, Bellugi (1979) は、アメリカ手話の単語には写像的なものやパントマイムのようなものもあり、ろう者社会で手話が使われるにつれて、手話単語の写像性が弱くなり、記号としての手話単語に変化していくことを述べている。そのため、アメリカ手話の中には、写像的なものとそうでないものが入り混じっており、これらを織り交ぜながら、手話話者は手話を生成していくとしている。

それに対し、Baker, Cokely (1980) は、手話はやや写像的な側面があるにしても、手話は基本的には音声言語と同様に恣意的 (arbitrary) な記号の集合体であるとしている。アメリカ手話を知らない被験者に対し、アメリカ手話の単語を提示し、どの程度意味を理解でき

るかについて検討した結果、ほとんど単語の意味を推測できなかったという実験もなされ、手話は写像的ではなく、音声言語と同様、無意味で有限の要素の集合から成り立っている言語システムであるということが定説になっていった。この無意味で有限の要素が、手話では「手型」「運動」「位置」の各パラメータであり、これらのパラメータの任意の組み合わせにより、手話単語が形成されると理解されるようになった。

この研究の方向性は、音声言語の分析の枠組みが、手話にも使えるという点で手話言語学の進展に大いに貢献したが、一方ですべて音声言語と対応させることによって、手話そのものの特徴を見えなくさせたことも事実である。近年、手話が音声言語と同等の自然言語であるということが社会的に認知されるようになり、手話だけに見られる特徴についても言及されるようになってきた。その中で、今まで手話研究の中では半ばタブーとされてきた手話の写像性という特徴を取り上げ、それが手話言語の構造にどのように影響を与えているかについて記述する論文も出てくるようになった (Emmorey, 2002; Emmorey, Herzig, 2003)。

また、子どもの発達研究の中で、子どもが言語を獲得するという現象、特に初語出現については、発達の大きなマイルストーンの一つとされている。その理由として、初語表出の前提として、内的表象が形成され、内的表象が記号の組み合わせによって表出される現象が初語であり、子どもの象徴行動の一つとして位置づけられることが挙げられる。すなわち、言語とは、実物を指さしたり提示したりするのは違って、表そうとする意味とは恣意的な関係に過ぎない記号を使って、その意味を表すという点で高度に象徴化された行動といえるだろう。そのため、初語表出の前提として、他者が注意を向けているものに自分も注意を向ける「共同注意」の成立や、自分と物と聞き手という「三項関係」の理解などが挙げられる (Baron-Cohen, 1995; Bruner, 1973)。内田 (1999) は、三項関係の成立が象徴行動の一つである指さしにつながることを指摘している。その指さしが、発達にともない、表すものと表されるものの独立性が強まって、表象的身振りになり、言語になっていくと考えられる。このようなことから、初語表出とは、表すものと表されるものが完全に分離し、一つ一つが意味をもたない記号によって表されたものの組み合わせによって意味を表すという現象と理解できる。象徴行動の究極の姿といってもよいかもしれない。

しかし、手話の特徴として写像性が挙げられるとしたら、手話の写像性という特徴が、手話獲得過程の過程

や処理が、音声言語の獲得過程や処理と異なるものになっている可能性も否定できない。

そこで本論文は、言語の写像性という視点から、手話獲得研究を概観し、言語の写像性が言語獲得にどのような影響を与えているのかについて考察する。Schick (2006) は、手話を視覚に動機付けられた言語と考え、多くの手話獲得研究で得られた知見を比較しながら、視覚言語であるという特徴が手話獲得に与える影響について検討している。本論文では、Schickの視点を参考にしながら、写像性というキーワードから、内外の手話獲得研究や筆者が観察した手話環境にあるろう児の事例について整理したい。

3. 手話の初語獲得

音声言語環境にある子どもは、個人差はあるが、おおよそ1歳の誕生日を迎える前後には意味のあることばを発するようになる (Bloom, Lahey, 1978; Harris, Jones, Brookes, et al., 1986; Locke, 1993)。しかし、手話環境にある子どもの場合、音声言語よりも早く手話の初語表出が見られるという現象が、手話獲得研究の中で報告されている。Prinz, Prinz (1979) は、ろうの母親をもつ聴児のアメリカ手話と英語の発達を縦断的に観察し、アメリカ手話の初語のほうが、英語の初語より数カ月早く出現したことを報告している。Bonvillian, Orlansky, Novack (1983) もまた、ろうの両親をもつ子ども11名を観察し、手話における初語出現の平均が8.5カ月なのに対し、音声言語における初語出現時期は平均13.2カ月であることを報告し、手話のほうがおおよそ4カ月から5カ月早く初語が観察されることを報告している。

手話のほうが音声言語より初語出現時期が早いことの理由として、以下の3つが挙げられる。第1に手話言語を表出する手指の運動発達のほうが、音声言語を表出する構音器官の発達よりも早いことが挙げられる (Bonvillian, Orlansky, Novack, 1983)。第2に、手話言語は、両親によってガイドされやすいが、音声言語の場合は、子どもの構音に関して、両親が直接介入できないことが挙げられる (Bonvillian, Orlansky, Novack)。第3に、手話の初語の多くは写像的であり、写像性が低い音声言語より、学習が容易であることを挙げている (Brown, 1977)。

この第3の理由については、その後多くの反論がなされた。Orlansky, Bonvillian (1984) は、手話環境にある子どもが手話初語として表出した語彙を分析した結果、写像的であると判断されたのは全体の3分の1程

度であった。Folven, Bonvillian (1991) もまた、13カ月以前に見られた手話語彙のうち64%は写像的ではなかったとしている。また、写像性の高低については、子どもの知識に依存することも大きいと考えられる。例えば、アメリカ手話で {milk} は、牛の乳を搾るように両手を交互に開閉させることによって表す。大人にとってこの手話単語は、写像的だといえるかもしれないが、牛の乳搾りを知らない乳児にとってこの手話は単なる記号に過ぎず、写像的であるとはいえない。

では、初語出現時期における手話の優位性は何によって起こるのであろうか。Pettito (1988) は、音声言語環境にある聴児にも見られるような文脈依存的なジェスチャーを研究者の過剰解釈により手話単語と同等してしまう可能性を指摘している。これらの問題は、手話の初語の定義に大きく関わっていると考えられる。

Folven, Bonvillian (1991) は、文脈依存的なジェスチャーと文脈が伴わなくても語彙として使用している手話語彙を区別して、再度手話環境にある子どもの初語の分析を行った。その結果、文脈から独立して、手話語彙だけで明確に意図を伝えている手話初語の出現時期の平均は12.6カ月であったという。この結果は、音声言語の初語出現時期とほとんど変わらない。武居、鳥越 (2000) もまた、手話言語環境にあるろう児2名を縦断的に観察し、手話初語がそれぞれ11カ月、13カ月に見られたことを報告しており、初語出現時期について手話の優位性は認められなかったとしている。

以上の知見をまとめると、初語出現時期における手話の優位性については、手話の初語と考えられてきたものは、音声言語環境にある聴児にも見られる文脈依存的なジェスチャーである可能性が高かった。そのため、手話初語の定義を厳格に行くと手話と音声言語の初語出現時期に大きな違いはないということになる。また、手話初語として獲得された語彙のうち写像的だと判断されたものは3割程度であり、その3割の中でも、乳児の知識を考慮すると手話の写像性を獲得に活用しているとはいえないと考えられる。

4. 手話における動詞の屈折の獲得

アメリカ手話や日本手話では、人や物、出来事などを表す際に空間を文法的に使うことが知られている。さらに、今この空間に存在しない人や物、さらに抽象的な概念であっても、ある手話空間に物や人を位置づけることにより、その空間が特定の事物を表すことになる。例えば、手話話者の右側で {コーヒー} という手話単語を作り、左側に {紅茶} という手話単語を作り、そ

の後、右側で「ない」という手話をし、左側で「余る」という手話をした場合、「コーヒーはなくなったけれど紅茶は余っている」という意味になる。このように、特定の空間で手話動詞を表出すると、過去にその空間に位置づけられたものと動詞が関連付けられることになる。

また、前述したように、手話の動詞の一部は、動詞の主語や目的語に、運動の始点と終点が一致する。このような手話動詞の特徴は、一見するとジェスチャー的であると見えるかもしれない。

Meier (1987) は、ろう児が手話動詞の屈折を獲得するのは、手話が写像的であることを利用しているのか、あるいは音声言語と同様、動詞の形態素レベルの変化として理解しているのかについて、実験的に検証した。Meier は、3歳から7歳までの10人の手話言語環境にあるろう児に、実験者が表した屈折を含む手話動詞が入った2語文を模倣させた。その際、主語と目的語の一致が正しく行われているかどうかを評価した。その結果、主語に正しく一致させている割合が73%なのに対し、目的語には87%が正しく一致させていた。目的語への一致が義務的であるのに対し、主語へは必ずしも一致させなくてもよいというアメリカ手話の文法にあった結果であり、単に映像的に模倣しているのではなく、形態素レベルの変化として理解していることが示されたという。

これらの動詞の屈折は、おおよそ2歳から3歳の間に獲得される。Fischer (1973) は、手話言語環境にあるろう児はおおよそ2歳半ごろに動詞を屈折させて使い始め、3歳ごろに動詞の屈折システムを獲得することを報告している。武居 (2003) もまた、手話言語環境にあるろう児と母親との会話を分析した。図2は、手話言語環境にあるろう児が表出した手話動詞の屈折の使用状況について示したものである。これを見ると、2歳の段階ではほとんど辞書形の動詞しか使っていなかつ

たのが、2歳半ごろになると主語か目的語のどちらかに動詞の始点と終点に一致させ始め、3歳ごろになると表現したいことに合わせて正しく動詞を屈折させていることがわかる。

このことから、ろう児は2歳から3歳までの間に、手話に対するメタ認知ができるようになり、単に手話の写像性を利用しながら映像的に模倣するのではなく、形態素レベルで動詞を分解し、主語や目的語に応じて正しく語形を変化させることができるようになっていくものと考えられる。

しかし、手話の写像性が動詞の獲得のある側面に影響を与えるとの報告がある。Casey (2000) は、8カ月から2歳11カ月の手話環境にあるろう児5人について、ろう児の手話発話の分析を行った。すると、5人すべてにおいて、子どもの近くに実物がある場合のほうが、実物がない場合より、有意に多く動詞を屈折させていたという。同様の結果は、Lillo-Martin (1988) によっても報告され、その場にないものを空間に位置づけ、そこに動詞の始点と終点を一致させることができるようになるのは5歳近くになると結論付けている。

以上をまとめると、手話動詞の屈折の獲得は、手話の写像性を利用して映像的に模倣することによって行われるのではなく、音声言語と同様、言語に対するメタ的視点ができ始め、動詞を形態素レベルで文法分析し、主語や目的語に応じて運動を変化させることにより、手話動詞の屈折を獲得していく。最初は実在するものにのみ動詞を一致させ、その後徐々に実在しないものに対しても動詞の一致システムを拡大させていくことから、この点においては手話の写像性が足場組み (scaffolding) の機能を果たしているといえよう。すなわち、実在しないものを空間に位置づけてそこに動詞を一致させるという最も高度な動詞の屈折のタイプを獲得する上で、手話の写像性がある一面において貢献しているということになる。

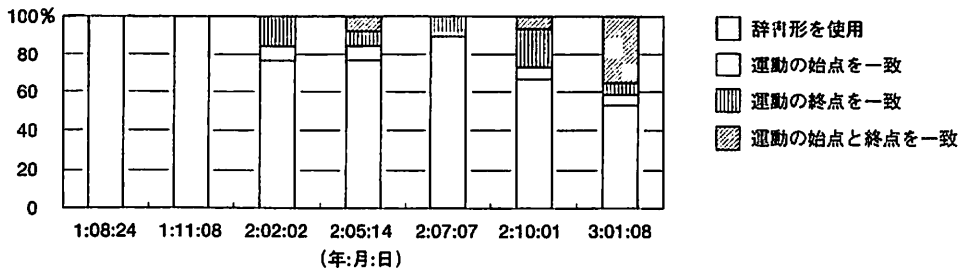


図2 ろう児が表出した動詞の屈折の使用状況 (武居, 2003 より)

5. CL (類辞) の獲得

手話言語学の中でいわれるCL (Classifier:類辞) は、手型が事物や材質、形状、大きさなどを表し、運動や位置をともなって動詞を形成する。例えば、親指と4指で「コ」の形を作った手型は、「車」という意味を表すが、この単語は名詞「車」として使用されることはほとんどない。この手型を前方に動かすことによって、「車が前へ走る」、この手型を左右に揺らしながら前へ押し出すことで、「車が蛇行運転をする」、この手型を作り、手首を返すことによって「車が横転する」という意味を表す。親指と4指で作った手型がCLであり、これがさまざまな運動をともなうことによって、無数の手話動詞を作る。このような動詞をCL動詞とよぶ。

CLと種々の運動の組み合わせ方は無限に存在するため、理論的にはCL動詞は無限に生成することができることになる。その点で、CL動詞は非常にジェスチャー的な要素を有していると考えられる。このCLは手型の使い方により3つのサブグループに分けることができる (Schembri, 2003)。

- (1) Entity classifier: 動作者や受動者、主体など意味的役割を表す手の形。手型の選択はカテゴリカル。{|人が歩く| |車が走る| など。
- (2) Handle classifier: 物を取り扱っている手の形。{|車を運転する| |蛇口をひねる| など。
- (3) SASS classifier: 指示物の際立った視覚的一幾何学的特徴を表した手の形。{|歯を磨く| |コップ| など。

CLは、例えば、人間の2本の足を人さし指と中指を伸展させることによって表したVサインの手型で表したり、親指と4指で「C」をかたどった手型が何か丸いものを表したりするように、非常に写像的である (Schick, 2006)。しかし、手話話者は、表したいものの形状や材質に合わせてアナログ的にCLの手型を生成するのではなく、有限の要素からなる手型の集合の中から選択することが知られている (Emmorey, Herzig, 2003)。

このように一見写像的であるように見えるCLは、手話獲得過程にある子どもにとっては、最も獲得が困難な事項の一つであり、8歳から9歳にならないとCLシステムを確実に理解し、使用できるようにはならない (Kantor, 1980; Schick, 2003)。CLは明らかに写像的であるにもかかわらず、その獲得には多大な努力が必要だということになる。

Kantor (1980) は、ろう児9名のCLの獲得過程について明らかにするために、成人ろう者のCL動詞を含む

アメリカ手話による発話をろう児に模倣させ、それを分析した。その結果、3歳ごろからCLの理解が始まり、6歳を過ぎるとかなり複雑なCLの使用が始まるという。3歳の時点では、人さし指と中指を伸展させたV-handにさまざまな動きをともなわせて「千鳥足で歩く」、「(山に) 登る」などの動詞を作ることができず、V-handの代わりにすべての指を伸展させたB手型を用いていた。複雑なCLをさまざまな運動をともなわせながら正確に使えるようになるのは8歳から9歳であるという。

また、CLの3つのサブカテゴリーの獲得については、Handle classifierが最も早く獲得されるという (Taub, 2001)。これは、話者が1人称となり、動作の主体となって表現するCLであるため、他のサブカテゴリーより透明性が高いと考えられる。他方、Entity classifierやSASS classifierも3歳ごろから出現し始めるが、使用すべき手型に誤りが多く見られ、5歳の段階で正しく使えているSASS classifierは70%以下であることが報告されている。

また、Lillo-Martin (1988) は、2歳8カ月のろう児が、右手で犬が歩いていることをCL動詞で示し、同時に左手でビルをCL動詞で表している事例を紹介している。これは2歳8カ月という早い時期に、両手で異なるものを表すことができていることを示している。しかし、右手の手型は人が歩いていることを表すV-handが用いられ、犬が歩いていることを表すには不適切であった。CLの獲得はかなり困難で8、9歳にならないと完成しないと考えられているが、この事例は、CLの概念そのものが子どもに理解されていないのではなく、瞬時に適切な手型と適切な運動と組み合わせることに困難があったことを示している。これは、CLの誤用の多くが、手型の選択の誤りや運動の誤りであり、CLそのものは誤りを含みながらも4歳を過ぎると頻繁に使われていることから裏付けられる。

以上のことから、Handle classifierが最も早く獲得されることに象徴されるように、CL獲得の早期には、CLの写像性がCL獲得を促進しているといえよう。しかし、CLにおける手型の選択や運動の組み合わせなどは、文法的要素が多分に含まれており、その獲得にCLの写像性は効力を発揮せず、語の形態的構造を分析するメタ言語的知識が必要になってくると考えられる。

6. ロールシフトの獲得

手話では、2人称や3人称の動作や行動を表す際に、話者が2人称や3人称になりきって、1人称として表

すロールシフトとよばれる文法が存在する (Friedman, 1977; Taub, 2001)。このロールシフトは、手話環境にある子どもにとっては、それほど困難なく獲得し、コミュニケーションの中に多用されることが報告されている。Morgan, Woll (2002) は、イギリス手話を獲得しつつある2歳1カ月のろう児に、ロールシフトを用いた表現が見られたことを記している。そのろう児は、イギリス手話で「咬む」という動詞を辞書形で示した後、犬にかまれて怖がる女の子になりきってびっくりした表情をしながら体を震わせた。

筆者が観察していた日本手話環境にあるろう児においても、2歳初めにはロールシフトによる表現が見られた。このロールシフトの獲得は、動詞の屈折と関係する。筆者の観察では、2歳初めには、「おばあさんが私にFAXする」と表現する際、自分が相手にFAXを送るという辞書形の単語「1-FAXする-2」を用いていた。これだけでは動詞の始点と終点の位置が誤っているため間違いになるが、この表現をする前に「おばあさん」と手話で表現した後、自分がおばあさんの立場になり、相手にFAXを送るという手話を行うロールシフトが行われていた。これがロールシフト中の表現であれば、ろう児はおばあさんになりきっていると考えられ、この表現は誤りではないことになる。筆者の観察では、動詞の屈折の獲得がまだできていない2歳前後にはすでにロールシフトが獲得されており、動詞を表現する際、まずロールシフトを用いて表現し、動詞の屈折の獲得が進むにつれて、動詞の屈折も用いられるようになるのではないかと考えられる。ただし、ロールシフトの獲得に関する研究は、内外あわせてもごくわずかであり、さらなるデータの蓄積と分析が期待される領域であろう。

ロールシフトによる表現は、他者になりきって談話を進めるという性格から、直接話法的であるといえる。それに対し、動詞の屈折を使って表すのは、間接話法的である。ロールシフトは、2人称や3人称が動作の主体であってもすべて1人称として表すため、ジェスチャー的であり、写像的であるといえる。しかし、ロールシフトの写像性は、動詞の屈折のような間接話法的表現の獲得を妨害するのではなく、むしろその前駆体として存在しており、発達にともない、必要に応じてロールシフトと動詞の屈折を使い分けていくのではないかと推測される。

7. 写像性と言語獲得

手話の写像性について取り上げることは、手話の言語性を否定するものと考えられ、手話研究の中で手話

の写像性については取り上げられずにいた。しかし、近年、手話が音声言語と同等の複雑性を有した自然言語であることが、言語学やその周辺領域から明らかになり、手話の写像性という特徴が、機能上どのような役割を果たしているかについて、議論されるようになってきた。

その中で、手話に写像性があるのかないのか、あるいは写像性という特徴が手話獲得において貢献しているのかしていないのか、という二律背反の問いをしがちであった。しかし、実際の手話獲得の過程はもっと複雑である。

以上の議論をまとめると以下のようなようだろう。

まず、手話のほうが、初語が早く観察されるという知見も多くあったが、それは手話の写像性がその理由ではなく、聴児にも見られるようなジェスチャーレベルのものを手話の初語であるとみなしていたことによるものであった。手話の初語の定義を音声言語の初語の定義に対応するよう定義しなおすと、音声も手話もほぼ同時期に初語が観察されたことも報告されている。結論として、手話の初語は12カ月前後に観察され、音声言語の初語出現の時期とほぼ同じであり、手話の写像性が手話初語表出に果たす役割は小さいと考えられた。

次に、手話動詞の屈折の獲得においても、手話の写像性を利用して映像的に模倣しながら獲得しているのではなく、おおよそ3歳前後に音声言語獲得と同様、形態素レベルで語を分析し、主語や目的語に応じて動詞の語形を変化させていることが明らかになった。動詞の屈折の獲得も、手話の写像性が果たす役割は小さいと考えられた。ただし、その場にはないものを空間に位置づけてそこに動詞を一致させるという最も高度な動詞の屈折の獲得は、5歳ごろになるまで達成されず、実在するものに対する動詞の一致のほうが早く獲得された。動詞を屈折させる範囲が実在から非実在へと広がる過程では、手話の写像性がその促進要因になっていることが推測された。

CLにおいては、おおよそ2歳ごろから使用が認められるが、完全にCLシステムを理解し、使用できるのは8歳から9歳であることが先行研究からわかっている。CLの中でも最も写像性が高いと考えられる Handle classifier が最初に獲得されることから、CL獲得初期においてその写像性が促進要因になっていることが考えられる。しかし、一見写像的に見えるCL動詞の獲得が8歳から9歳にならないと完成しないのは、CL獲得においても語の形態的な分析と言語に対するメタ認知の

発達が必要であることが推測され、写像性が果たす役割は、CL獲得初期に限定されるともいえる。

このように、手話獲得において写像性が貢献する時期と領域があることが明らかになった。これは、手話獲得が写像的でジェスチャー的要素が強い表現から写像性の低い手話単語へとという一元的な流れのもとで手話が獲得されるのではなく、手話獲得のさまざまなレベルで写像性が獲得の促進要因となっていた一方、写像性の果たす役割が小さい領域もまた存在した。今後、言語獲得における手話の独自性という視点から分析を行うことも必要になってこよう。

文 献

- Baker, C., Cokely, D. *American sign language: a teacher's resource text on grammar and culture*. Silver Spring, MD, T. J. Publishers, 1980.
- Baron-Cohen, S. *Mindblindness: an essay on autism and theory of mind*. Cambridge, MA, MIT Press, 1995.
- Bloom, L., Lahey, M. *Language development and language disorders*. New York, Macmillan, 1978.
- Bruner, J. *Child's talk: learning to use language*. New York, Norton, 1973.
- Bonvillian, J. D., Orlansky, M. D., Novack, L. L. Development milestones: Sign language acquisition and motor development. *Child Development*. 54 (6), 1435-1445 (1983).
- Brown, R. "Why are signed languages easier to learn than spoken languages?" *Proceedings of the national symposium on sign language research and teaching*. Stokoe, W. C. (ed.), 9-24 (1977).
- Casey, S. "Agreement" in gestures and signed languages: The use of directionality to indicate referents involved in actions. Unpublished doctoral dissertation, Sandiego, University of California (2000).
- Emmorey, K. *Language, cognition, and the brain: insights from sign language research*. Mahwah, NJ, Lawrence Erlbaum, 2002.
- Emmorey, K., Herzig, M. "Categorical versus gradient properties of classifier constructions in ASL." *Perspectives on classifier constructions in sign language*. K. Emmorey (ed.), Mahwah, NJ, Lawrence Erlbaum, 2003, p.221-246.
- Fischer, S. The deaf child's acquisition of verb inflection in American Sign Language. Paper presented at the annual meeting of the Linguistic Society of America, San Diego (1973).
- Folven, R. J., Bonvillian, J. D. The transition from nonreferential to referential language on children acquiring American Sign Language. *Developmental Psychology*. 27 (5), 806-816 (1991).
- Friedman, L. A. "Formational properties of American Sign Language." *On the other hand: new perspectives on American Sign Language*. L. A. Friedman (ed.), New York, Academic Press, 1977, p.13-56.
- Harris, M., Jones, D., Brookes, S., et al. Relations between the non-verbal context of maternal speech and rate of language development. *British Journal of Developmental Psychology*. 4, 261-268 (1986).
- Kantor, R. The acquisition of classifier in American Sign Language. *Sign Language Studies*. 28, 193-208 (1980).
- Klima, E., Bellugi, U. *The signs of language*. Cambridge, MA, Harvard University Press, 1979.
- Locke, J. *The child's path to spoken language*. Cambridge, MA, Harvard University Press, 1993.
- Lillo-Martin, D. Children's new sign creations. In M. Strong (ed.), *Language learning and deafness*. Cambridge, Cambridge University Press, 1988, p.162-183.
- Meier, R. Elicited imitation of verb agreement in American Sign Language: iconically or morphologically determined? *Journal of Memory and Language*. 26, 362-376 (1987).
- Morgan, G., Woll, B. "The development of complex sentences in British Sign Language." *Directions in sign language acquisition*. G. Morgan and B. Woll (eds.), Amsterdam, John Benjamins, 2002, p.255-275.
- Orlansky, M. D., Bonvillian, J. D. The role of iconicity in early sign language acquisition. *J. of Speech Hear. Disord.* 49, 287-292 (1984).
- Petitto, L. A. "Language" in the pre-linguistic child. *The development of language and language researchers*. Kessel, F. (ed.), Hillsdale, N.J., Lawrence Erlbaum Associates, 1988, p.187-221.

- Poizner, H., Klima, E. S., Bellugi, U. *What the hands reveal about the brain*. Cambridge, Mass, The MIT Press, 1987.
- Prinz, P. M., Prinz, E. A. Simultaneous acquisition of ASL and spoken English: Phase I: early lexical development. *Sign Language Studies*. 25, 283-296 (1979).
- Schembri, A. "Rethinking "classifiers" in signed languages". *Perspectives on classifier constructions in sign language*. K. Emmorey (ed.), Mahwah, NJ, Lawrence Erlbaum, 2003, 3-34.
- Schick, B. The development of American Sign Language and manually coded English systems. *Oxford handbook of deaf studies, language, and education*. M. Marschark, P. Spencer (eds.), New York, Oxford University Press, 2003, p.219-231.
- Schick, B. Acquiring a visually motivated language: evidence from diverse learners. *Advances in the sign language development of deaf children*. Schick, B., Marschark, M., Spencer, P. E. (eds.) New York, Oxford University Press, 2006.
- Stokoe, W., Casterline, D., Croneberg, C. *A dictionary of American Sign Language on linguistic principles*. Washington DC, Gallaudet College Press, 1965.
- 武居渡. 聾児の手話言語獲得過程 (1) 一動詞の獲得と語形変化一. 日本特殊教育学会第41回大会発表論文集. 227 (2003).
- 武居渡, 鳥越隆士. 聾児の手話言語獲得過程における非指示ジェスチャーの役割. 発達心理学研究. 11(1), 12-22 (2000).
- 武居渡, 四日市章. 聾児の言語獲得に関する文献的考察—手話言語獲得の側面から—. 心身障害学研究, 23, 147-157 (1999).
- Taub, S. *Language from the body: iconicity and metaphor in American Sign Language*. Cambridge, Cambridge University Press, 2001.
- 鳥越隆士. ろう児における手話言語獲得—研究の動向と展望. 日本手話学術研究会論文集. 9, 39-64 (1988).
- 鳥越隆士. ろう児はいかに手話を学ぶか—第一言語としての手話の習得過程. 手話学研究モノグラフ V (1995).
- 内田伸子. 発達心理学. 東京, 岩波書店, 1999.
- 米川明彦. 手話言語の記述的研究. 東京, 明治書院, 1984.

《ABSTRACT》

Does Iconicity of Language Facilitate Language Acquisition?: Perspectives from Research on Sign Language Acquisition

Wataru TAKEI

Faculty of Education, Kanazawa University
(Kakuma, Kanazawa, Ishikawa, 920-1192, Japan)

Sign language is a visual-gestural language used by deaf people. It is evident from many linguistic studies that sign language is a fully grammaticized language. The acquisition of sign language in deaf children occurs just as the acquisition of spoken language in hearing children does. However, sign language is marked by rich iconic potential, in comparison with spoken languages. The goal of this paper is to explore the acquisition of iconically motivated language from several different perspectives such as the first signs, verb agreement, classifiers, and role-shift in deaf children. Existing data on development was inadequate to help understand the transition from iconic form to more grammaticized constructions.